

カルデアの^{まきびと}牧人 ～校長だより～ No.1 2

アリとキリギリス（3学期始業式）

令和5年がスタートしました。3年生は大東高校生として過ごすのも後3ヶ月しかありません。一日一日を大切に過ごしてほしいと願っています。

今年は卯年ということもあり、「因幡の白兔」や「ウサギとカメ」の話が取り上げられることも多い正月でした。「因幡の白兔」は古事記に記された日本神話（類話は世界中にある）とされていますが、「ウサギとカメ」の話は元々は「イソップ寓話」であることをご存じでしょうか？日本ではこのイソップ寓話が翻訳された『伊曾保物語』（江戸初期）によって広く知られるようになったとされています。

始業式で話題にしたのはこのイソップ寓話の中の「アリとキリギリス」のお話です。

夏の間キリギリスはバイオリンを弾き歌って過ごしていた。一方アリは冬に備えて食べ物を蓄えるために働いていた。やがて冬が来てキリギリスは食べるものがなくなりアリに分けてくれるようお願いする。アリは「夏に歌って過ごしていたなら冬は踊って過ごせば」といって追い出してしまった。

おおよそ知られているのはこのような内容で、アリは計画性や勤勉性の象徴として描かれ、将来に向けてコツコツと努力が大切であるという教訓を受け取るのが一般的なのではないかと思えます。しかし見方を変えれば、キリギリスは顕著な才能を持った存在であって、特定の分野で尋常ならざる集中力を持っている者と肯定的にとらえられこともできます。「コツコツ努力」は確かに大切ですが、それだけが唯一正しいものではありません。

「学ぶ」ことに関し、今「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」が求められています。文科省では「個別最適な学び」を「一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うこと」と説明していますが、要するに、それぞれの資質・特性・性格などにあったアプローチで学ぶことが大切であるである、ということでしょうか。

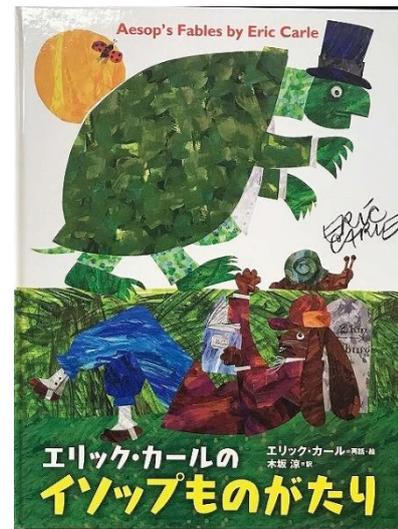
コツコツ毎日積み上げることが苦手な人は別なやり方を考えればよいし、もっと極端に言えば「できないこともある」ということを受け入れ、「これならできる」というものを探

すことも大切であるということかもしれません。

話の最後に、一人一人のかけがえのない存在が認められ、生徒全員に活躍の場がある大東高校であり続けることを願って『はらぺこあおむし』の作者エリック・カールの独特な解釈が加わった「アリとキリギリス」を紹介しました。興味がありましたらこれも手にとってご覧ください。

ちなみに、エリックカール版アリとキリギリスのページの最後には次のような言葉が添えられていました。

- 今日をたいせつにすることが、明日につながる●



【書誌情報】

イソップ寓話集 (岩波文庫) 中務 哲郎 (翻訳)

万治絵入本 伊曾保物語 (岩波文庫) 武藤 禎夫 (著)

伊曾保物語一天草本 (岩波文庫) 新村 出 (翻訳)

エリック・カールのイソップものがたり (偕成社) エリック・カール (再話・絵), 木坂 涼 (翻訳)